

八久保さんを偲んで

横 倉 節 夫

数年前に八久保さんと一緒に、韓国の蔚山、ソウルを調査したときのことを思い出す。まだ元気だった頃の八久保さんの笑顔や身振り、手振りが浮かんできてくる。そして、八久保さんが今後の本格的な調査について熱っぽく話したことや、ソウルの地下街での古切手探しに付き合わされたこと、などが。しかし今は、八久保さんの人柄や、教育、研究の一端を記して、偲ぶほかない。

*

八久保さん是一九五七年に熊本県で生まれ、国士舘大学、法政大学大学院で人文地理学を学んだあと、二〇〇二年に神奈川大学外国語学部に助教授として赴任してきた。二〇〇六年四月に人間科学部創設に伴って同学部へ所属変更となり、二〇〇八年四月に教授となった。主な担当科目は、一般教養、教職関連の人文地理学、そして人間科学部の専門科目の景観地理学、産業地理学やゼミナールなどである。

八久保さんはこれらの授業を熱心に、しかも長年にわたる調査、研究に基づいて行っていた。私のゼミの学生さん達も、写真や映像を見せ、丁寧な解説や総括をする授業に好感を寄せていた。しかし時には、蘊蓄を傾

けすぎて（？）、授業のはじめに、「汽車、汽車、シュッポ、シュッポ……」や「箱根の山は天下の嶮……」と、やおら歌いはじめたこともある。けれども、これは学生さん達にはたく不評だったらしい。

授業の後に、私の研究室にきて、これらの歌が日本の自然、風土を巧みに表したものであり、したがって地理学を学ぶ上でも大事な歌であることを、八久保さんは力説した。だが、言葉の端々から、八久保さんのご不満のほんとうの理由は、自慢の美声を誰ひとりとして褒めてくれなかったこと、にあったらしい。お陰で、私はご不満を一身に背負わされて、八久保教授から特別講義をたっぷり受けるハメになったのである。

しかし、八久保さんの本領は、学生さん達をかわいがり、慈しんだことに現れている。八久保さんの研究室には絶えず学生さん達が出入りしていたし、入院中も学生さん達を病室にまで呼んでゼミを開いていた。学生さん達も八久保さんのこうした思いを感じていたし、そして実際、八久保さんのこうした思いに救われた学生さんも少なからずいただろう。それにしても、こうした思いの裏側には、人間は有限な存在である、という実感があつたのではないか——私には、そう思えて仕方がないのだが。

研究面でも、八久保さんのこうした思いが感じられるが、なかでも近代日本における酒造業の産地形成や地域連関についての研究は、その典型といつてもいいかもしれない。「近代地主酒造業の形成と展開」や「酒造業における経営近代化の嚆矢とその帰結」などの論文で、八久保さんは地主制と結びついた近代日本資本主義の発展という大きな視野から酒造業の展開を考究しているが、社会科学の論文としても読みごたえのある研究となっている。しかし同時に、八久保さんは、熊本や会津といった地域固有の自然条件や歴史的社会的条件に目を注ぎ、そうした条件に基づく、あるいはそれが発現する事象や事実を救い上げて、歴史過程におけるその

意味を問題とする。ここには、個別を個別として大事にして安易に一般に解消しないという八久保さんの思いや姿勢が現れており、それが八久保さんの研究に人文学としての地理学的研究という刻印をもたらしているのではないかと思う。八久保さんの酒造業に関する研究は、日本国内だけでなく、邦人酒造業の朝鮮半島・台湾における展開にまで及んでおり、研究生生活の主軸であった。

もちろん、八久保さんの研究は酒造業につきるわけではない。近年では、とくに二つの研究が注目される。一つは、景観地理学の分野に関するが、八久保さんは神奈川大学のCOEプログラム「非文字資料の体系化」研究の一環として、産業景観や郵便切手、「洪澤写真」の分析などから研究を進めていた。もう一つは、日本経済のグローバル化に伴う、日本国内の産業構造・産業地域の変動に関する研究で、産業地理学の分野に属する。機械工業や鉄鋼業などを中心に、産業構成や地域連関の変動とそれが雇用や地域生活にまで影響を及ぼすという、示唆に富む研究であった。

しかし、これらの研究もまとまった成果が出る前に中断を余儀なくされてしまった。また、酒造業研究は八久保さんの大学院時代から続くライフワークといってよいが、そろそろ一本にまとめてもいい頃だと期待していただけない、かえすがえすも残念でならない。

*

八久保さんは、教育や研究のほかにも、学内、学部内のいろいろな仕事も引きうけていた。赴任以来の入試作問責任者や、人間科学部人間科学科主任などの仕事を、いつも誠実にそして責任をもってやり遂げていた。そうしたことを思い起こすと、いまさらながら頭の下がる思いがする。そして、かけがえのない同僚を失った

という思いも、ますます強くなる。

最後に、八久保さんを励まし支えてくれた平井さんに、同僚の一人としてお礼申し上げます。

八久保先生へのお詫びと感謝

三星 宗雄

最近帰宅するのが遅く、自分の研究室がある建物のシャッターが閉まる時間を過ぎることが多い。そのような時必ず八久保先生のお部屋の前を通る。今でも名札が掛かっており、天窓を通して室内のダンボールの箱が見える。この部屋の元主はそれらのダンボールの中の資料を駆使して、新しい研究成果を生み出そうとされていたに違いない。それを思うとこの部屋の元主の無念さが伝わってくる。ダンボールも今や居場所がなくなつた。誰か引き取って、八久保先生の臓器とも言ふべきそれらの資料をどこかで再生してくれる人が現れるのを祈るばかりである。

私が平井先生から追悼の言葉を依頼されたのは、学内の共同研究プロジェクトで一緒に活動し、このプロジェクトの成果出版物が八久保先生の遺作となったからである。しかしそれをさしおいても八久保先生には大変お世話になった。八久保先生は共同研究のテーマの中で景観の問題をご担当された。われわれ横浜に住む人間には中華街というと横浜中華街を思い浮かべ、わが国にはそれ以外にはないか、せいぜい神戸の中華街を思い浮かべるくらいである。しかし実際には那覇をはじめとして、福岡や長崎など九州各地に、その跡地を含め、

見られるのである。先生は多くの美しい写真とともにその景観の特徴やその歴史について教えて下さった。恥ずかしながら私は先生の論文で初めて固有名詞として、なぜ「中華街」ではなく、「横浜中華街」なのを知ったのである。

先生は国内だけでなく、韓国へも足を延ばされ、ソウルの中華街についてもご紹介下さった。先生は韓国へは何度も足を運ばれ、大きなテーマの下に研究を進めておられたようだ。それも今や灰燼に帰した。あのダンボールの中身はその資料なのかも知れない。

先生には何度も韓国に誘われた。それは私が景観を色彩心理学的な立場からアプローチしていたからである。先生はご専門が人文地理学で、景観をその地における産業構造との関連で捉えておられた（と、私には思われる）。一方私は景観をイメージとして切り離し、その絵画的な美醜について考えていた（と、私には思われる）。色（色彩）が持つ効用は「（表面から見えない）内部の状態を示す」ことである。内部の産業構造が変われば、それに伴って（表面の）景観も変わる。それがちようと色（色彩）の持つ効用と似ていると思っていた。それを八久保先生にお話する矢先であった。韓国への旅は結局実現しなかった。韓国の地でそんなことを話していたら、と今更ながら思う。ごめん、八久保先生。

もう一箇所、誘われた場所がある。それは私のふるさと会津若松である。会津若松が酒造の産地であったからである。先生はわが国における地場産業としての酒造産業の構造の解明に全力を傾けておられた。会津若松市内だけでなく会津一円の酒どころは委細もろさず悉知されていた。どの酒が一番自分の口に合うか、どこで利き酒をさせてくれるか、次から次へと地元の私にも分からない大小の銘柄が出てきて舌を巻いた。いつか

私の実家に泊まっていたとき、私のふるさとを「案内していただく」ことになっていたが、これも果たせなかった。八久保さん、ごめん。

八久保先生はさすがに地理の先生だけあって、地理的な感性が人一倍鋭かった。先生は肥後は熊本のご出身である。肥後もつこすである。私は会津っぽである。どちらも頑固者である。私はそういう会津っぽ氣質が嫌でたまらなく、なるべく「軽く」生きようとしてきた。会津っぽのことなど忘れていた。しかし九州の人は違った。ある時、ある事に対してとった私の態度に、八久保先生に「やっぱり会津の人だ」と指摘された。思いも寄らなかったご指摘であった。先生に指摘されて、あらためて自分を見た。酒の地理的な分布だけでなく、こうした人間性の分布まで先生のデータベースには入っていた。

何年か前に、八久保先生の文章が人間科学部の推薦入試問題として出題された。「もし友を選ばば」という内容であったと思う。地理の先生らしく、自分ならなるべく遠くから来ている友を選ぶ、と書いておられた。私は八久保先生のおかげで自分のふるさとから千キロ離れた九州の人々の人間性を知り、九州という地について、その歴史について、その色彩について学び始めた。それ以来私は数度九州に足を運んだ。八久保さん、有難う。最後に、本当は一番お伝えしたいことだが、そういうことは軽く言おうと思う。先のある事で、私がとった態度云々には続きがあった。「先生、分かっているよ」と言って下さった。有難う、八久保先生。

この夏は暑い日が続く。今でもあの図書館脇の細い道をページジュの上着に身を包んで、汗をかきながら、えくぼの八久保先生がやって来そうだ、こう言いながら。「先生、暑いッスね」。さようなら、八久保先生、肥後もつこす。

八久保先生を偲んで

尹 亭 仁

私の記憶には笑顔の八久保先生しかいません。初めて会った二〇〇二年四月一日の日も、一〇年の歳月が流れ杳くの中で静かに眠っている先生に「さようなら」と言って手を振った日も、先生は笑顔でした。

八久保先生と私は学部唯一の着任同期でした。当時外国語学部長だった日高先生と一緒に人文研究所に向かう途中、自己紹介を始め色々と言葉を交わしました。童顔のやさしそうな瞳、腰の低い態度、おっとりした口調からいいおじさんの印象を受けました。その時、私は八久保先生のご名字をハチクボと正しく読めたものの、名前はコウシではなくアツシと読んだのですが、それを先生は妙に喜んでいました。二、三年前、なぜかまたこの話が出た時にも先生はまた嬉しそうでした。きっと、ご自分の名前でかけをしていたと思います。お名前を正確に読めた人はほとんどいないと言っていたので、勝率が上がるたびに、なんだか勝った気がして笑みがこぼれたのかも知れません。確認したいですが、もうすべはありません。

着任同期と言いながら、私はこの一〇年間八久保先生の研究室に行ったことはありません。実は研究室がどこにあるかも知りませんでした。一六号館で一緒に仕事をするようになってからも用事がある時は八久保先生

が訪ねてきましたし、平井先生の部屋の前で会うことが多かったからです。

それなのに、今年は不思議にも先生の研究室の前を通らないと行けないところにある教室で授業をやることになりました。新学期が始まっていたのに、先生の部屋には明かりがついていませんでした。今日は来ていないのだと思った私は、そのうちお宅訪問ならぬ研究室訪問を敢行しようと、にやにやしながら自分の研究室に戻ったものでした。しかし、その企ては実現できませんでした。届いたのは一枚のお通夜の知らせでした。いつも笑顔だったので、そんなに深刻だとは思わなかったため、知らせを聞いた時には信じられず、人前で子どものようにわんわん泣いてしまいました。

3年ほど前、みなとみらいホールで大学の吹奏学部の定期演奏会があった時に、先生が奥様と一緒に見えていたので挨拶を交わしました。よくなったのかと聞いたら、いつもの笑顔で首を横に振りました。私は自宅から近いという気軽さから行きましたが、自宅が遠い先生は学生思いでいらっしやっただけだと思います。お通夜の夜は、後ろの席から学生たちのすすり泣きの声が絶え間なく聞こえてきました。学生を思う心の強い先生だったから、慕われていたことが改めて分かりました。

「立山」と「高清水」は八久保先生が教えてくれたお酒の銘柄です。私が出張で富山に行くと言ったら先生は嬉しそうに「富山は立山だよ」と言ってくれました。それで私は富山からの帰りに大量の立山を買ってきました。先生にも一本さしあげました。また秋田へ行くと言ったら、「秋田は高清水だよ」と教えてくれました。私は高清水を何本か買ってきました。仙台、新潟にも行きました。そのつど先生は何か銘柄を教えてくださいましたと思いますが、忘れてしまいました。私がお酒を飲まなくなったからです。でも、立山と高清水は、初恋の人の

名前のように忘れそうありません。先日、韓国の新聞に日本のお酒特集が載っていました。八久保先生に見せてあげたかったし、聞いてみたいことも色々ありました。悔しいです。

平井先生から八久保先生の研究室が切手の宝の山だと聞く前までは、そういう趣味があるとは知りませんでした。考えてみたら切手集めは地理が専門の人ならありうる趣味でした。私は今まで地方に行くと、JRの駅前で写真を撮るのがちよつとした楽しみでした。しかし切手集めもいろいろな気がしてきました。連れ合いにこれからは行く先々で地名が分かるところで写真を撮るのではなく切手を集めると言ったら、いいんじゃない、集めて分類するのはあなたの得意分野でしょうと言われました。

切手集めはお酒集めより長く続きそうです。国内だけでなく、海外に行った時も手に入れて来ようと思います。授業で世界の色々な言語の特徴を取り上げながら、文字の特徴が分かる紙幣も見せたりしていますが、切手も登場させてみたくなりました。取り上げるたびに八久保先生のことを思い出すと思います。

今もまだ八久保先生が、キャンパスにいるような錯覚を時々起こします。しかしそれが、間違いであることを思い知らすのは葬儀の時の記憶です。柩の中で静かに眠っている先生を見ました。私にとってこういう対面は初めてでした。多少怖い気持ちとさようなら言わないと後悔しそうな気持ちと葛藤している時に、平井先生が「是非、見てみてください。格好いいですよ」と背中を押してくれました。普段と変わらぬ笑顔の先生がそこにいました。先生の穏やかに眠っている顔は今も鮮明に覚えています。

ふと大学の友人を一人思い出しました。彼は卓球が非常にうまい人で、誘われた時の私のレベルはひどいものでした。卓球場で知り合いから運動神経があまりにも鈍いから上達の見込みがないとまで言われた私でした。

しかし、彼は怒りもせず、文句も言わず笑顔で私が変に返したボールを決まったところにきちんと戻してくれました。そうしているうちに私のフォームは安定してき、打つ時にスピードもついてきました。夏休みにある卓球場に行った時は、「こんなに卓球がうまい女子学生は初めてだ」とほめられました。八久保先生は私にとってそういう人だったような気がします。先生に会うとよく冗談を言ったりぐちをこぼしたりいたずらをしたりに変に笑いながらふざけたりしました。しかし先生はいつもの笑顔でまじめに応じてくれました。あの友人のボールのように。

八久保先生は私の気の置けない数少ない同僚の一人でした。小春日のような人だったと思います。先生の悲報に接してから一人で何度も泣きました。先生の早すぎる死が悲しかったのもありますが、気兼ねもせず話ができる同僚が一人いなくなったことがもっと悲しかったからです。共同研究会を立ち上げて一緒に韓国へ調査に行く約束もしたのに。

九月になってからなぜか先生の研究室に行ってみたくになりました。明かりが消えた部屋は「在室」になっていました。ネームプレートはついたままでした。本当は中にいるでしょう、と叩いてみたくになりました。「不在」よりはなんだか救われた気持ちでした。

後期の足音が聞こえてきます。また週一回は先生の研究室の前を通らないといけません。私は、八久保先生はいつ戻れるか分からない調査旅行に出かけたと思うようにしました。もう会うことはできないけど、忘れることもない八久保先生、Bon voyage!

八久保さんを悼む

—フィールドワークの思い出—

浜田 弘明

二〇一二年度の新学期が始まって間もない頃、八久保さんの訃報を聞き、我が耳を疑った。八久保さんは、私と同じ年のまだ五四歳であり、あまりにも早すぎるご逝去であったからである。

八久保さんとの出会いは、今からちょうど三〇年前に遡る。誕生日も近く、血液型も同じO型で、同じ地理学を専攻し、似た者同士の仲であった。最初にお目にかかったのは、一九八二年に開かれた法政大学人類学研究会（通称、人類研）の例会の席であったと記憶している。当時、私は法政大学の地理学科卒業後、相模原市の博物館準備係に学芸員として勤務し、八久保さんは、国士館大学の地理学科を卒業後、法政大学大学院の地理学専攻に在籍されていた。

その後も、人類研でしばしばお目にかかり、ことに例会後の飲み会の席で親交を深めさせてもらった。当時から、八久保さんが酒好きだということは自他ともに認めるところであったが、その酒について地理学的研究をされているとの話を聞き、とても個人的関心を惹かれた。当時私は、石仏について地理学的研究を進めていたため、お互いに変わったテーマで地理学研究をしているものだと言い合ったことを記憶している。冗談なが

ら八久保さんはよく、趣味と研究を兼ねて酒を飲んでいるのだと話されていた。

一九八四年になって、社会人として私も法政大学大学院の地理学専攻に進み、八久保さんの後輩となり、その後、共同調査や共同研究を何度となく行うこととなった。最初は、八四年夏から始まった、人類研の第三次檜原村合同調査であった。檜原村は、東京都西多摩郡にある都内唯一の村で、伝統的民俗行事や文化財がまだ色濃く残る時期で、八久保さんは酒造や地場産業、私は石仏や水車についての調査を行った。

翌八五年からは、法政大学卒業生を中心メンバーとして「外濠会訪中団」を組織し、以後三年間にわたり、中国各地を巡った。第一回目の訪中は、外国人に開放された直後の海南島であった。海南島は、南シナ海に面していて中国最南端に位置し、今日ではリゾート地として知られる島である。しかし当時は、まだ十分な宿泊施設も無く、招待所と呼ばれる施設に泊まったものの、赤錆びた水のシャワーしか出なかったことが記憶に残る。海南島で墓地や石造物の調査を行った際、八久保さんにもメジャーを持ってもらうなど、大変協力して頂いたことを思い出す。この時の結果は、「海南島を訪ねて」として月刊『地理』三一巻三号に掲載しているが、巻頭のカラー写真には、墓の前で八久保さんがメジャーを持って計測している姿が残っている。当時、中国の都市部以外では、まだ冷蔵庫がほとんど普及していなかったため、ビールと言えば常温ビールであったが、海南島では昼から水代わりに口にしたと記憶している。

八六年の第二回目訪中では、福建省の山岳地域の少数民族などを訪ねたが、この時、八久保さんの参加は無く、次にご一緒した訪中は、八七年の内モンゴル自治区の訪問であった。当然のことながら、この訪問先も整備された宿泊施設は無く、草原地帯の一般のゲル（パオ）に宿泊させてもらった。歓迎会の席では、大変アル

コールド度数の高い馬乳酒が振る舞われ、私は一口で参ってしまったのだが、八久保さんの平然と飲んでいる姿を見て、改めて酒豪であることを思い知らされた感じがした。また、晴天の夜、どこが天の川なのか分からないほどの満天の星の下で、日本から持って行った日本酒バックをととても美味しそうに飲んでいた八久保さんの姿も忘れることが出来ない。

さらに、八八年から始まった神奈川県座間市史民俗調査では、人類研の主要メンバーに参画を願い、ここで八久保さんには、食生活と戦後生活の変化について担当して頂いた。調査は五年にわたったが、当時、茨城県取手市にお住まいで、座間まで通うのは、さぞかし大変であつたろうと推測する。そのようなハンデものともせず、熱心に調査して下さい、予定通り九三年に『座間市史 民俗編』を刊行することができた。

ここまでの一〇年間、八久保さんとは間断なくフィールドワークをともにし、親交を深めさせて頂いた。その間に、私が一足先に結婚し、結婚式にはもちろん八久保さんにもご出席いただいた。間もなくして、八久保さんも和子さんと結婚され、今度は私がつくば市の結婚式場へと向った。

その後、二〇〇二年に八久保さんは神奈川県に就職され、同年、私は桜美林大学に転職した。その二年後の〇四年、福田アジオ先生から、神奈川県がCOEに採択され非文字資料の研究を進めるので、協力してもらえないかとお声をかけて頂き、以後、私は非常勤のCOE教員として神奈川県にお世話になることとなった。八久保さんもCOE研究員としてすでに参画されていて、私は八久保さんとともに、香月洋一郎先生をリーダーとする「環境と景観の資料化と体系化」班に所属することとなり、「景観の時系列的研究」をテーマに研究を進めることとなった。

この研究の中で、戦前に撮影された「澁澤フィルム」の現地比定を八久保さんと共同で行い、〇四年と〇五年の二回にわたり韓国へと渡った。このころは、すでにお酒を節制されており、韓国でもあまり飲酒はされなかった。この時の、蔚山（ウルサン）での景観調査結果については、「写真資料と景観変容―澁澤フィルム分析に向けての―」のタイトルで、COE調査研究資料1『環境と景観の資料課と体系化に向けて』に、八久保さんと共著で掲載させてもらったが、結局これが、最後の共同調査となってしまった。

足かけ三〇年にわたり、フィールドワークを共にさせてもらった八久保さんのご冥福を心からお祈り申し上げます。